生田正輝先生の思い出

霜野壽亮

生田正輝先生への感謝と尊敬の念は、研究者としての私の人生を貫いています。先生に対するこの気持ちを、先生との思い出深い事柄のなかに綴ることで、先生の御魂に、心より感恩の意を御報告させていただきたいと思います。

先生に初めてお会いしたのは五十年も前のことになり、それが、いつどこであったのか、定かに想いだすことはできません。遠い記憶をたどると（それゆえ正確ではないかもわかりませんが）、社会学か新聞発達史に関わる先生の講義を日吉の大教室で受けたのが、先生との最初の出会いではなかったかと思われます。そのときの先生は、一学生としての私にとっては遙かに遠い存在でありました。少しばかり間近に先生と接することができたのは、先生が三田で担当されていた、新聞研究所（現メディア・コミュニケーション研究所）の基礎理論研究会（かかる名称だったと思うのですが）に、私が参加してからのことであります。その当時の先生はすこぶるエネルギッシュ

であり、ゼミの議論でも常に熱く語りかけられ、問いかけられていたことが、懐かしく感じられます。ゼミ生からの質問にはわかりやすく説明をしてくださるのですが、その質問の不備をまずはやや難しいお顔で解き明かし、ゼミ生が質問の稚拙さに気づくや、優しい笑顔で、議論をさらに深めるべき点を示唆するという指導法が多かったように覚えています。不思議なことに、先生から何を教わり、どの論点を課題として出されたのか、個々には思い起こすことはできないのに、先生の優しい笑顔は、つい先日のことのように目に浮かんできます。私にとって、先生のこの笑顔は、終生変わることのない宝物になっていったのです。

この基礎論ゼミで学ぶことの楽しさを実感したことが、私に学問への憧れを生じさせたことは言うまでもありません。このゼミがご縁で、先生を指導教授にお願いして大学院に進むこととなり、先生からのご指導を直に仰ぎながら、研究への一歩を踏み出すことができたのは、実に幸いなことでありました。ただ、大学院における先生の授業は、学部のときとは全く違うものであると私には感じられたのです。確かに、先生が院生の議論を淡々と整理し、笑顔でさらなる論点を示唆する点では何も変わりはないのに、その笑顔には優しさだけでなく、院生を研究者の卵として信頼する実に厳しい眼差しが含まれていたのです。個別の指導をいただく際も、先生はこの笑顔を絶やすことがなく、いつしかその笑顔に取り込まれていた私は、先生の期待に応えなければならないと、研究への意欲を固く意識したものです。私が研究者の道を歩み始めることができたのは、先生のこうしたご指導のほかの何ものでもありません。その後も、この温かく見守りつつも強く自立を促すご指導により、数多くの困難を乗り越えることができました。これまで何とか研究者として過ごし得たのも、先生のご指導のお陰であると心に銘じております。

先生の、優しくかつ厳しい笑顔を想いだすとき、深く感謝申しあげ、かつお詫び申しあげねばならない出来事があります。一つは、私が若くして突然の大病に倒れたことです。日頃の不養生がたたってまさかの入院となり、

先生には多大なご迷惑とご心配をおかけしてしまいました。それにもかかわらず、先生からは様々なご配慮をいただき、励ましもいただきました。そのときの笑顔が、それはただ優しいだけのお顔ではありませんでしたが、私にどれほどの希望をもたらしたかは、言葉で言い尽くすことができません。大げさに言えば、先生の笑顔で病を癒すことができたと思っております。

もう一つは、私の研究内容に関わることであります。私の研究関心が少しずつ変化し、先生のご専門であるコミュニケーション論の分野からは、少し距離が生まれてしまったのです。行為理論に傾倒し、相互行為とコミュニケーションの異同を分析しているうちに、相互作用のなかで、および相互作用から構成される社会体系のなかで、権力関係を考察するという方向に関心が移ってしまった私のわがままにも、先生は理解を示し、見守ってくれたのです。その後もアドバイスやお叱りを受けることは多々ありましたが、論文も自由に書かせていただくことができ、私なりの研究を続けることを、先生はお許し下さいました。やはり、いつまでも、先生の笑顔に包まれていたのだと思います。その笑顔に、研究者としてどれだけお応えすることができたかと省みますと、まことに微々たることしかなしえず、申し訳ない気持ちでいっぱいであります。

かよう、余りに不肖な弟子でありますが、先生の笑顔に助けられて研究してこられた幸せをかみしめ、改めて深謝させていただきます。先生、本当に有り難うございました。